

Research Centers and Institutes

■ 研究所・センター ■



三田キャンパス

- アート・センター
- 会計研究室
- 教職課程センター
- グローバリサーチインスティテュート (KGRI)
- 経済研究所
- 言語文化研究所
- 国際センター
- 古文書室
- 産業研究所
- 斯道文庫 (しどうぶんこ)
- 日本語・日本文化教育センター
- 東アジア研究所
- 福澤研究センター
- 法学研究所
- ミュージアム・コモンズ (KeMCo)
- メディア・コミュニケーション研究所
- 福澤諭吉記念慶應義塾史展示館



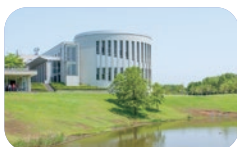
日吉キャンパス

- 外国語教育研究センター
- 教養研究センター
- システムデザイン・マネジメント研究所 (SDM 研究所)
- 自然科学研究教育センター
- スポーツ医学研究センター
- 体育研究所
- デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
- 保健管理センター
- メディアデザイン研究所 (KMD 研究所)
- GICセンター (Center for Global Interdisciplinary Courses)



芝共立キャンパス

- 医療薬学・社会連携センター



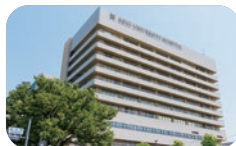
湘南藤沢キャンパス

- SFC 研究所
- 心身ウェルネスセンター



矢上キャンパス

- 先端科学技術研究センター (KLL)



信濃町キャンパス

- 総合医科学研究センター
- 医科学研究連携推進センター
- 先端医科学研究所



先端研究教育連携スクエア

- 新川崎先端研究教育連携スクエア
- 鶴岡先端研究教育連携スクエア (先端生命科学研究所)
- 殿町先端研究教育連携スクエア

※慶應義塾組織図の研究所・センターを掲載。このほかに世界トップレベル研究拠点としてヒト生物学・微生物叢・量子計算研究センターがある



慶應義塾の 研究所・センターを巡る

新入生の皆さん、在学生の皆さん、ご入学および進級おめでとうございます。新たな生活が始まるこの時期、これからの学びに大きな期待を寄せていることでしょう。

大学での学びは、教室での授業だけではありません。慶應義塾には、学部・研究科以外の幅広い活動の場として研究所・附属施設が多数あります。従来の学問領域にとどまらない柔軟な研究環境を構築し、ユニークで独創的な活動を続けています。これらの拠点は、皆さんの「学びたい」「成長したい」という意欲をかなえる場所となるでしょう。

本特集では、数ある研究所・センターの中からその一端をご紹介します。新学期という絶好の機会に、自らの専門を超えて可能性を広げる「知の最前線」をぜひ訪ねてみてください。

多彩な外国語学習の機会を利用し「複言語」に挑戦



外国語教育研究
センター所長
理工学部 教授
山下一夫
やましたかずお

日吉キャンパス第3校舎にある外国語教育研究センターは、塾生向けに多彩な外国語学習の機会を提供しています。「本センターの特色は『複言語』『複文化』をコンセプトに、一人の人間が複数の言語で考え、発信する力を育むことです」と話すのは山下一夫所長です。

センターでは大学各学部の外国語科目とは別に「特設科目」を開設。英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、中国語、朝鮮語、アラビア語など10言語約110科目を開講しています。「その中には各言語の最上級レベルの科目や、英語ではアカデミック・ライティング、オーラル・プレゼンテーションなど目的に応じて学ぶ科目もそろえています」（山下一夫所長）。さらに各学部が日吉キャンパスで開講する外国語科目を他学部・大学院生でも履修できる「オープン科目」という

制度も整備し、「複言語」を学びやすい環境を整えています。

施設面では、ICTを活用した言語学習の授業をフレキシブルなスタイルで行うことができるCALL (Computer Assisted Language Learning) 教室を設置。塾生の自律的かつ効果的な学習をサポートしています。

「本センターは単なる語学学習を超えて、言語ごとに異なる思考様式や価値観に触れる機会も提供します。異なる文化的背景を持つ他者を理解し、対話、協働する力は、将来どの分野に進もうとも塾生にとっては不可欠な基盤となるでしょう」（山下一夫所長）。

2025年に開設された「シェイハ・ファアティマ・アラビック・ラーニングセンター（ALC）」は、そうしたセンターの理念を象徴する取り組みです。アラブ首長国連邦（UAE）のシェイハ・ファアティマ皇太后のご支援によって設立されたALCはアラビア語教育を軸に、アラブ世界の社会や文化、歴史への理解を深める学習環境を



ALCではアラブ世界の言語や文化を学ぶ

用意。専用の学習スペースを備え、アラビア語初学者から上級者まで段階的に学べるカリキュラムを通じて、言語と文化を一体として学ぶことが可能です。また夏には、アラビア語入門講座の開講も予定しています。

本センターでは、塾内外を対象とした語学習得に関する講演会やワークショップを開催するほか、中学卒業以上であれば誰でも受講できる公開講座「慶應外語」をオンラインで開講。現在13言語82講座を学ぶことができます。週1回×全12回で、塾生には受講料割引の特典もあります。

トップアスリートによる指導で多彩なスポーツを体験



体育研究所
教授・所長
須田芳正
すだ よしまさ



体育研究所
助教
梅本雅之
うめもと まさゆき

体育研究所は体育・スポーツ科学に関する研究と教育を実践し、塾長杯などのスポーツ大会や講演会開催などスポーツ振興を担っています。スポーツ振興活動として開催されている塾生対象の塾長杯スポーツ大会は、毎回多くの塾生が参加し大変盛り上がる大会です。

塾生が受講する日吉キャンパス、三田キャンパスでの体育科目は研究所に属する教員が担当しています。「慶應義塾では伝統的に健康な身体を保つことが知的活動の前提として重視されました」と話すのは須田芳正所長。ご自身も体育実技科目「サッカー」と「フットサル」の授業を担当しています。

体育実技科目はサッカー、ゴルフ、

野球（軟式・硬式）、テニス、バスケ、トボールなどの球技のほか、武道や水泳、アーチェリー、フェンシングなど専門性の高い競技も選択することができます。また、セーリング（ヨット）、スキー、スケート、アウトドア、マリンスポーツなど、合宿形式のシーズンスポーツ科目も用意されています。

「日吉・三田両キャンパスで開講されている体育科目は実に40種目以上に及びます」と話す梅本雅之助教は経済学部在学中に競泳バタフライ日本代表



ビーチバレーでは、チーム一丸となってボールをつなぐ

として、国際大会のユニバーシアードで優れた成績を残しました。今年度からは陸上男子100メートル日本記録保持者である山縣亮太専任講師（総合政策学部卒業）が着任。現役選手として競技を続けながら、塾生の指導を行う予定です。体育科目はプロや日本代表選手などそうそうたる経歴を有する教員が塾生を指導しています。一流アスリートのほか、スポーツ生理学やスポーツ心理学、コーチングなど競技を支えるスペシャリストも多く在籍し、バラエティあふれる講義やトレーニングに関する演習を担当しています。2025年度からはスポーツマネジメントやスポーツ価値創造、スポーツサイエンスについて学ぶゼミ形式の演習も開講し、学部を超えて塾生たちが共に学んでいます。

こうした塾生への体育教育の実践は、研究活動にも反映され、近年は韓国、オーストラリアの大学とのスポーツ交流等を通して、教育、研究両面での国際化を積極的に展開しています。



4月2日(木) 13:00~14:30に
ガイダンスがあるよ！
@独立館 地下2階DB203教室

寄稿

03

■教養研究センター

複雑怪奇な現代に

足らざるを如何に補うか



教養研究センター所長
法学部 教授
片山 杜秀
かたやま としひで

教養。英語ならリベラル・アーツ。この世で自由に生きるために必要な技芸。古代ギリシアには「自由七科」、古代中国には「六芸」がありました。文学や数学や音楽など。しかし複雑怪奇な現代にはそれでは足りません。足らざるを如何に補うか。教養研究センターの使命です。

理解のなかなか届かぬものとなり、科学技術の世界は高度化が過ぎて幾ら勉強しても追いつかぬほどです。

だから慶應義塾の学問も常に更新され続けています。大学は世界の複雑さに負けない高度な専門教育にこそしなねばなりません。専門性を極めるには学部や学科に分かれていることが重要です。そうでなければその道を深められません。しかし繰り返し言えば、世界はどんどんややこしくなり、膨らんでいておられます。学部専門領域が覆えるところから、世の中は常にはみ出して広がっていくものでしょう。

もちろんそこに対応していくのが学部の使命です。とはいえ、専門性の深化と変化への機動性の間にはどうしても矛盾や不足、隙間も出てきましよう。ならばどうするか。大学とはよくできたもので、機動的に足らざるを補う仕掛けを作っているのです。教養研究センターのような仕掛けを。日々複雑化するこ

の時代に即応していくにはきつと必要なのに、学部ではすぐの設置が難しい。そういう授業を立ち上げて、多くの学部の学生に開かれたかたちで開講する。教養研究センターのミッションです。

少し具体的にしましょう。「アカデミック・スキルズ」。複数の教員と少人数の履修者による濃密な対話型の授業です。物の考え方を根底から訓練し、知の技法を体得して複雑化する時代に耐えうる人間を育てる実験的な試みです。それから「金融リテラシー入門」。人が自由に生きるためには必要不可欠なお金。この生々しいが不可避なテーマを正面から扱います。さらに「ゲーム学」や「エンターテインメントビジネス論」。現代日本の文明の根幹でありながら、既存の学部では拾いきれない領域でもありましよう。他にもまだまだあります。困難な時代を生き延びる知恵と発想を身に付けたい塾生諸君、教養研究センターに注目せよ！



授業から生まれたロングセラー
『アカデミック・スキルズ』第4版
(→詳細はp.32をチェック)



学部を超えた 多彩な「場」を 生かして学ぶ 学生に聞く

視野を広げ、思考を深め、未来を切り開く。所属学部以外にも「学び」の場を求める塾生にその動機ややりがいなどを聞きました。

(所属学部学科・学年は、2026年2月取材時のもの)



専攻でオスマン帝国などイスラム世界の都市文化について学んでいます。高校時代の世界史で東西文化の中間点としてこの地域の歴史に関心を持ったことがきっかけでした。

飯田 私は岸田さんと同じ文学部で「社会の常識を問い直す」学びがしたいと、社会学専攻で学んでいます。学部の授業では、性別や文化、障害、セクシュアリティなどによる差別の問題を扱うことがあり、そこでは「常識」が個人を縛る不条理となるという例をよく見かけます。困難を単なる個人の問題にせず、社会の構造から論理的に考える姿勢を育んでいけたらと思っています。

入学前からメディア・コミュニケーション研究所（メディアコム）に関心がありましたが、ジャーナリストや広告業界を目指しているわけではありません。純粋に社会に対する広い視野を持ち、より良い社会の実現のために自分ができることをしたいという気持ちからでした。

後藤 より良い社会をつくりたいという気持ちは私も同じです。2年生のときにサークルの先輩の影響を受けて「2025塾生会議」に参加しました。

——皆さんが学部以外での「学び」を求める理由を教えてください。

岸田 文学部で学芸員資格取得のための授業を取っていたこともあり、学芸員の仕事を体験できることに魅力を感じて慶應義塾ミュージアム・commons（KeMCo）で働き始めました。慶應義塾に関わるあらゆるコミュニティが文化財を基点として交流する場であり、塾内のさまざまな場所にある収蔵・展示施設を活用した「分散型ミュージアム」のハブでもある特色あるミュージアムです。現在、展覧会に関連した一部の企画・運営、そして広報の仕事に従事しています。学部では東洋史学



慶應義塾ミュージアム・commons（KeMCo）学生スタッフ
文学部東洋史学専攻4年

岸田博斗君

KeMCo学芸部門担当。また体育会重量挙げ（ウエイトリフティング）部主将としてチームを牽引し、2025年には60大会ぶりとなる早慶戦勝利へ導いた。



メディア・コミュニケーション研究所研究生
文学部社会学専攻2年

飯田 権君

入学前から憧れていたメディア・コミュニケーション研究所（メディアコム）で津田正太郎教授のゼミに所属する。塾員の兄もメディアコムで活動をしていた。

「SDGsを実現するための慶應義塾のヴィジョン・目標・ターゲットを提言」するために学部を横断して学生が参加する塾生会議は、これこそ「慶應義塾でしかできないこと」だと感じています。

塾生会議の活動は大きめに言えば、春学期は専門分野の先生方のレクチャーを受け、夏休みのサマーカーンプを経て、秋学期にグループ毎に提言をまとめて12月にプレゼンテーションを行います。活動は基本的に毎週木曜日の6限を使って行われ、私のグループでは大学の派遣留学制度の改善案を提言しました。

——今後チャレンジしていきたいことはありますか。

飯田 とにかくできるだけ多くの視点や情報を自分の中に取り入れたいですね。メディアコムはそれができる環境だ

と思っています。岸田さんはKeMCoで働いていらつしやいますが、先輩にミュージアムをメディアとして捉え、人と社会との関連の中で位置付ける研究をしている方がいました。

岸田 私がKeMCoで広報として取り組んでいる仕事に近い研究です。昨年は終戦80年だったので「戦争体験の継承」におけるミュージアムの役割について考えました。「体験」という形がないものを後世に伝えるのは難しい課題ですが、例えば慶應義塾のキャンパスには80年前の空襲の傷跡がまだ残っています。そうした“モノ”を通して記憶を伝えていく方法はあるはずで、それもミュージアムの役割ではないかと考えます。

飯田 本当にそうですね。昨年、私はゼミで都内のある中高一貫校を訪ねて、戦時中の「学級日誌」を用いた平和学習について取材しました。「モノを媒介とし、共感を呼び起こす」という記憶の継承は、太平洋戦争の経験者が減少する現在、注目すべきだと感じます。また、震災後の能登半島を訪れ、現地の新聞記者の方に震災時の報道についてお話を伺ったりもしました。これから時

間と空間を超えて、多くの人々の声に耳を傾けていきたいと思っています。

後藤 私は今後も塾生会議への参加を通して、塾生をはじめ多くの人々にもっとSDGsを身近に感じてもらえるように頑張っていきたいです。塾生会議を通してこれまで苦手意識があったプレゼンなど情報アウトプットのスキルを多少なりとも向上させることもでき、学部での学びにも良い影響を与えてくれました。日吉キャンパス近隣の小学生にSDGsに関する絵本を読み聞かせたことは楽しかったです。時には学部の授業やサークル活動との両立で苦労することもありましたが、それ以上に得るものが大きいですし、自分を成長させる機会になったと思います。後輩にもぜひ参加を勧めたいです。



塾生会議 2025・2026 メンバー
理工学部管理工学科3年

後藤 楓君

ビジネスや金融に興味があり、経済学部と迷った末に理工学部に入學。2年次より「塾生会議」に参加した。学生団体の慶應義塾大学茶道会所属。